

292. 平成11年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その1)

本年度も滋賀県下では多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。その成果の情報交換の場として、平成12年3月3日「第76回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が開催されました。

ここにその発表の一部を紹介いたします。今後の参考として御活用いただければ幸いです。

なお、御多忙にもかかわらず、御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1. 春日山古墳群G-5号墳の調査

春日山古墳群

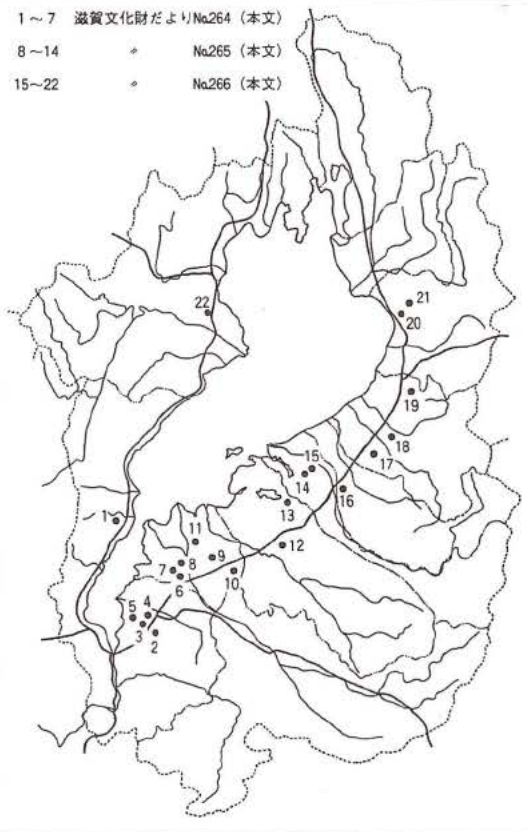
琵琶湖西岸の堅田丘陵で公園整備が計画され、丘陵尾根の先端部分に位置するG群5号墳を対象に調査を実施した。調査対象古墳は調査前の現況では墳形不明瞭で、また主体部施設の痕跡のひとつとなる石材が周辺に散布しておらず、古墳と確認できる資料に乏しい状態であった。調査の結果、墳丘北側の3分の1が崩れ、墳頂中央部が溝状に大きく欠落した状態の直径18m円墳1基(従前の分布調査では5・6号墳の2基とされていた)と判明した。

主体部は石片袖式の横穴式石室である。玄室は床面で長さ2m幅3mを測る。石材は多くが失われていたが玄室床面は攪乱を受けておらず、良好な状態で資料が得られている。床面から須恵器(杯・高杯・ハソウ・



春日山古墳群G-5号墳石室完掘状況

1~7 滋賀文化財だよりNo.264(本文)
8~14 * No.265(本文)
15~22 * No.266(本文)



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

長頸壺・短頸壺・平底壺・蓋) 鉄器(太刀・刀子・鉄斧・馬具) 玉類(管玉(水晶/碧玉製)・小玉(ガラス製))および銀環等いずれも6世紀中頃の遺物が出土した。棺材、釘等は検出されていない。

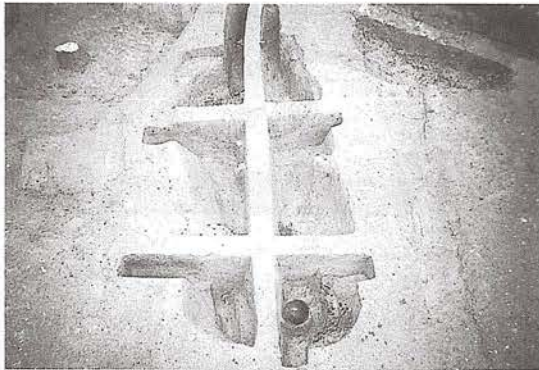
石室に使用された石材は湖東流紋岩類である。この石材は当遺跡周辺には存在しないものであり、琵琶湖対岸の沖島・長命寺周辺から運び込まれたものであると確認された。

(財)滋賀県文化財保護協会 横田洋三)

2. 中世の集落跡を検出

大將軍遺跡

大將軍遺跡は、瀬田丘陵の先端部に位置する縄文時



土墳墓（西から）

代から近世にかけての複合遺跡である。今回、民間開発に伴い、約350㎡を調査し、中世の掘立柱建物跡3棟、井戸跡2基、土墳墓、溝跡、堀状遺構などを検出した。

土墳墓は、長辺2m以上、短辺0.8m、深さ0.4mを測り、東西方向に軸をもつ。埋土は3層に分かれ、上層は炭化物を含んだ人為的に埋めた土で、最下層は埋納時の灰白色粘質土が敷かれていた。この灰白色粘質土の上に13世紀後半の完形の近江型黒色土器が2個体、西端付近で出土した。

堀状遺構は、長さ8m以上、幅5m以上、深さ1.5mを測る。南北方向に延びる溝である。埋土は大別して2層に分かれ、上層では13～14世紀の瓦器碗や近江型黒色土器、羽釜などが、下層では12世紀後半～13世紀の土師皿などが出土している。近隣の調査区で類似する溝跡が検出されており、堀状遺構は南北方向に推定50m以上延びていたと考えられる。

大將軍遺跡は、官衛的色彩の強い遺跡として8世紀～10世紀中頃まで存在し、再び12世紀後半から建物群が形成されるのだが、過去の調査では当該遺跡の西域を中心に、中世期の堀状遺構や掘立柱建物跡などの遺構が検出されていた。今回の調査区は遺跡の東端に位置し、隣接する調査区や今回の調査において中世の遺構が検出されたことにより、東域においても当該期の遺構が存在することが判明した。特に、堀状遺構が区画溝の役割を果たし、集落はさらに東側に広がっていると想定される。

（草津市教育委員会 楠部博世）

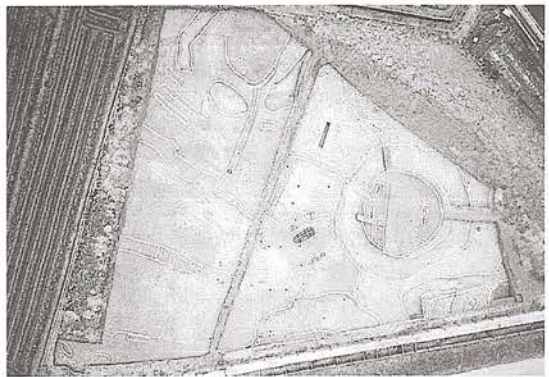
3. 古墳6基を新たに検出

草津市 谷遺跡

谷遺跡は、草津市西矢倉二丁目一帯に所在する弥生時代から中世にかけての時期の複合遺跡であり、過去に、草津川改修事業に係り、14,000㎡あまりの調査が実施されている。その際に、古墳・竪穴住居跡・掘立

柱建物跡などの遺構が確認されており、滑石製品や原石・剥片などが多数出土している。今回新たに、古墳6基、土墳墓2基、掘立柱建物跡2棟、井戸2基などが検出された。

本調査で確認された古墳は、円墳1基、方墳5基から成り、墳丘を巡る周溝から出土した土器の特徴から、5世紀末～6世紀初め頃に築造されたものとみられる。また、周溝から滑石の原石や剥片が見つかっており、特に、方墳の周溝から滑石製品（有孔円板・勾玉模造品・白玉など）や白玉もしくは有孔円板の未製品が、出土していることから、周辺で滑石の加工が行われていたことが明らかになった。なお、円墳の東側には、2基の土墳墓が並んで掘られており、円墳との位置関係から、土墳墓には、円墳の被葬者と縁の深い人物が葬られたと考えられる。



谷遺跡全景（上が南）

過去の調査成果をふまえて検討した結果、今回の調査地は、谷遺跡の中でも、墓域にあたり、集落の中心部は、当該区域より北西側に存在することが明らかになった。なお、本調査地が墓域として用いられなくなった後、しだいに墳丘部が削平された結果、古代末から中世には、掘立柱建物を有する集落が営まれるようになったとみられる。その後、その集落もすたれ、最終的には、一帯が田地として用いられるようになり、現在に至ると考えられる。

（草津市教育委員会 島津知子）

4. 4基の方墳と見られる遺構を検出

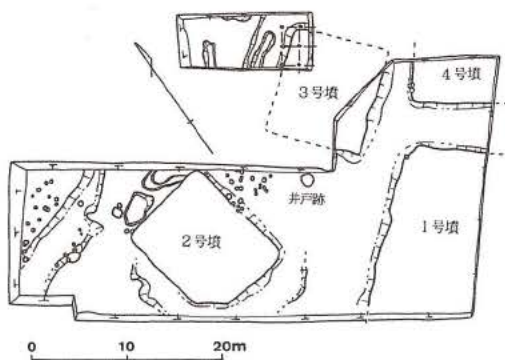
草津市 モンゴマチ 門ヶ町遺跡

門ヶ町遺跡は、これまでの調査で、弥生時代中期の玉づくりや石器生産に関わる集落跡、古墳時代初頭の方形周溝墓群、鎌倉時代の集落跡などが確認されている。

今回の調査区は、遺跡の南東端付近にあたる部分で、調査の結果、方墳と見られる遺構が4基検出された。

このうち1号墳は、調査区内で南北13m以上、東西10m以上の墳丘が確認され、調査区外へと広がっていた。つぎに、1号墳の西側で検出された2号墳は、4辺とも確認され、長辺13m×短辺10mの長方形墳であった。両墳はともに周溝を有し、それらの埋土の最上層から5世紀末～6世紀前半の土器が多量に出土したことから、埋没時期をその頃以降に求めることができる。

一方、これらの2墳の北側から、一辺11m程度の3号墳と一辺9m以上×5m以上の規模を持つ4号墳が検出された。ただし、これらの墳丘は周溝を共有しており、また、出土遺物が認められないことから、1、2号墳とは性格の異なった遺構である可能性も考えられる。それは、以前に隣接地で行った調査で、古墳時代初頭の方形周溝墓群が確認されているため、この広がりが当調査区に及んでいることもあり得る。



門ヶ町遺跡遺構平面図

なお、これらの墳墓群は律令期に削平を受けるものとみられ、その後は掘立柱建物集落が営まれ、鎌倉時代に至っても建物跡、井戸跡などが確認されている。

今回の調査成果により、門ヶ町遺跡に古墳群が存在した可能性が考えられるようになり、当遺跡の新たな性格を知ることができた。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

5. 古墳時代と中世の墓跡などを検出 草津市 御倉遺跡

御倉遺跡は、草津市御倉町・橋岡町・矢橋町にまたがった縄文時代から中世に至る集落跡・墓跡として周知されている。

平成5年度には、当調査地の東側が調査され、古墳時代の方形周溝墓10基・室町時代頃の火葬跡27基・時期不明の道状遺構1条などが検出されている。また平成10年度には、平成5年度のさらに東側が調査され、5世紀後半～末頃の方墳2基・古墳と同時期に考えられる方形周溝墓1基・平安時代末～鎌倉時代前半頃と

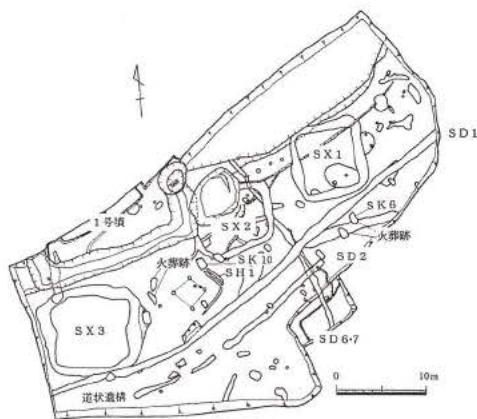
考えられる掘立柱建物3棟などが検出されている。

平成11年度の発掘調査では、5世紀～6世紀頃の南辺14mを測る1号墳と6世紀代の東辺約11m、北辺約6mを測る2号墳が検出されている。

方形周溝墓は3基検出され、いずれも弥生時代後期頃と考えられる。実測図におけるSX1は1辺が約6.2m、SX2は東辺で約5.6m、南辺で6～7m、SX3は東西約9m、南北約8.2mを測る。

竪穴住居は1棟検出され、南の壁溝が約3m、東の壁溝が約2.2mを測り、主柱穴は直径0.2～0.4mの円形および楕円形を呈する。時期は不明である。

火葬跡は10基以上確認されているが、長さ1m前後、



A1地区遺構実測図

幅0.7m前後を測る平面隅丸長方形を呈したものが多く、中央に幅0.2m程の溝を持つものがある。時期は不明であるが、東隣の平成5年度調査時にも同様のものが確認されており、本例も室町時代頃と考えられる。

道状遺構は1条確認され、幅0.5～1m、深さ0.3～0.5mを測る溝(SD1とSD2)が約2mの間隔を保って南西方向へ伸びているものである。

2基の方墳は5世紀～6世紀頃と考えられるが、古墳の平面形や出土遺物などから、1号墳→2号墳への変遷が想定できる。今回の2基の方墳と平成10年度調査の2基の方墳の年代を比較すると後者がやや古いと考えられる。即ち、平成10年度調査の1号墳→2号墳→今調査の1号墳→2号墳へと変遷して行くものと推測される。

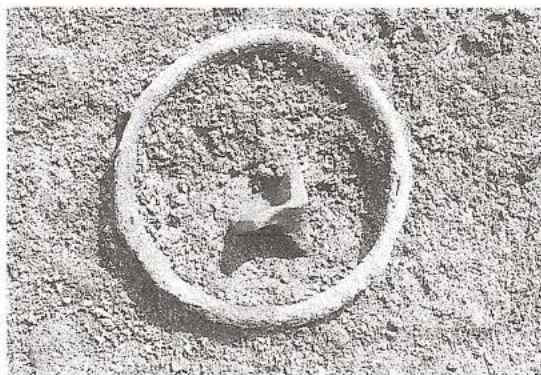
(助滋賀県文化財保護協会 三宅 弘)

6. 青銅製品が河川から出土 栗東町大字下鉤字神ノ子 下鉤遺跡

宅地造成に先立ち約1,000m²の面積で調査を実施した。調査区は弥生時代後期の大型祭殿と中期末の二重環濠

が発見された1997年度調査区の西隣で、今年度の調査では弥生時代中期の環濠1条と後期の溝、柵列、堀立柱建物1棟、河川、平安時代の溝1条を確認した。河川は幅約10m、深さ約1.5mで調査区の東から北西側に蛇行して流れていて、本調査区では長さ30m、幅5m分を検出した。河川からの出土遺物は縄文時代晩期、弥生時代前・中・後期の土器がみられるが、その大部分は後期後葉のものであり、河内・北陸・東海等の搬入系土器も含まれている。土器以外の遺物は石杵・石鎌・砥石等の石製品、木製品では建築部材、自然遺物ではクルミ・モモ等の核の他桜の樹皮が比較的多く確認された。青銅製品は銅鏃が9点、銅環1点、その他ガラス小玉4点が出土した。

銅鏃は1989年に7点、1992年に2点が同じ河川から出



銅環出土状況

土して計18点となった（中には多孔銅鏃も2点含まれている）。銅環は鋳造品で円環型の銅鋼と形態が共通するが、外径で12.5cmと大きく他に類例を見ない。

下鈎遺跡では銅塊が出土していることから青銅器生産が行われていた可能性が指摘されていたが、今回の調査でもそれを裏付けることとなった。今後鋳型や鋳造遺構の発見を期待したい。また、水銀朱の付着した石杵やガラス小玉の出土は祭祀や葬送儀礼に関わるものであり、隣接して存在する祭殿と考えられる大型堀立柱建物の性格を考える上で興味深い資料である。

(財)栗東町文化体育振興事業団 佐伯英樹)

7. 7世紀後半の木簡が出土

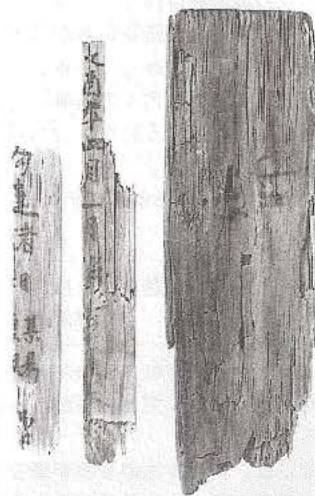
栗東町 十里 じゅうり 十里遺跡 じゅうり いせき

十里遺跡は、弥生時代から中世以降まで続く複合遺跡である。

今年度の調査は、2箇所で行われており、個人住宅と道路建設に伴うものである。両者は隣接した調査区で一連の遺構を確認することができた。遺構は、飛鳥時代の区画溝、堀立柱建物、土坑などがある。区画溝

は、幅約4m、深さ約0.8~0.9mの大溝（SD-2）を中心に、そこから派生する溝（SD-1・3・4）によって、現段階で3区画に区切られている。最も南側に位置するSD-3の外側には、堀立柱建物が少なくとも2棟以上存在している。これらの建物は、約4m×4mのほぼ正方形プランで4本の屋内柱をもち、通常の住居や倉庫とは異にすることから、特殊な建物の可能性がある。出土遺物は、SD-2を中心に木製品や土器が多量に出土している。土器では、「道」と墨書された土器や、漆、墨痕が付着した土器、さらには赤彩された土器もわずかに存在する。生産遺物としては、フィゴの羽口、溶解片、砥石、製塩土器などがある。木製品では、木簡をはじめ、斎申、刀形、舟形などの祭祀具や、鎌、木槌、杵などの農・工具のほか、タモ、櫛、容器なども出土している。木簡は3点出土しており、1号木簡には、「まがり勾連」がみられる。栗東町に残る「まがり」の字銘との関連が注目され、栗太郎における豪族のひとりではないかと考えられている。2号木簡は、幅7.4cm、厚み1.4cmの板に「みちのし道師」と書かれたものである。「道師」とは、中央から派遣された職能をもった集団とする説や、道路に関連することという説がある。また3号木簡は、「乙酉年四月一日」と書かれた紀年名木簡で、同じ層から出土している土器の年代観から、ほぼ685年として大過ない。これらの木簡は、いずれも同じ層で出土していることから、ほぼ同時期に廃棄されたものと思われる。今後、地方と中央との関連を探るうえで重要な資料となるであろう。

(財)栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)



SD-2 出土木簡